

日本民家園だより

特集

旧菅原家住宅

vol.63



企画展示「雪に暮らすー川崎で出会う北国ー」

2007年1月5日(金)～5月27日(日)

『日本民家園収蔵品目録7 旧菅原家住宅』刊行

写真：雪の旧菅原家住宅（2006年1月撮影）

【雪国生まれの古民家】

山形県旧朝日村の松沢（現：鶴岡市松沢）は、庄内地方の西南端にあり、出羽三山の一つ・湯殿山の西麓に位置する集落です。四方を山に囲まれており、毎年冬になると3メートルを超す雪に覆われる、いわゆる豪雪地帯です。

旧菅原家住宅は、こうした雪深い山あいの土地で、18世紀末（推定）に建築されました。集落の人からは「ナイム（名右エ門）」の屋号で呼ばれた家で、屋根の中間にのぞく「ハッポウ」という窓をもつ、この地域特有のユニークな外観が印象的です。当園へは昭和45（1970）年に寄贈されました。

【肝煎を務めた家柄】

この家に住んでいた菅原氏は、代々肝煎を務めた家柄といわれる農家でした。また、湯殿山のお膝元である土地らしく、先祖が山伏をしていたという話も伝わっています。

【住宅の間取りと使用法】

旧菅原家住宅は中二階と二階をもつ多層民家です。現在民家園に復原されている姿は建築当初のもので、菅原家の人々は時代ごとに住みやすくするためのリフォームや建て増しを行ってきました。そして、この家のなかで、多いときには家族16人が生活していたのです。

入り口には重いウード（大戸）が入っていました。ニワは、復原後は土間になっていますが、移築前は板敷きで、縄を縛うなどの作業をする場所でした。ふだんの煮炊きはオメ（エ）のイロリで行い、ヒトヨセ（大勢のお客が来る）の機会にはニワのカマ（かまど）も使用しました。また、カマの隣にある部屋のイロリは、オメ（エ）で行ってはいけな肉の調理をするためのものでした。ナヤには、牛馬をはじめとするさまざまな家畜がいました。ナガシには、外のホリと呼ばれる池から引いた水が24時間いきおいよく流れていました。

寝る部屋のことをネドコと呼びます。当主夫婦と小さい子どもはウヘヤ、男の子は中二階をネドコとしていました。ただ、カミデだけは大切にされ、山伏などの来客が泊まりに来たときや、節句の雛人形やお盆のお供えを飾るときなどに使用されました。カミデの隣・シモデは、貴重な現金収入源である養蚕などに使用される部屋でした。

寄贈者・竹治郎氏の子供たちの世代には、中二階と二階は主に物置きとして使用されており、ハッポウ窓の傍にイモや豆などの食料を保存していました。

【母屋の周りー付属屋とホリー】

ところで、当園に移築された旧菅原家住宅は母屋であり、同家の敷地内には、ほかに複数の付属屋が建っていました。大切なものを収納したドンゾ（土蔵）、堆肥を作るタイヒゴヤ、薪をたくさんストックしておくタキギゴヤなどが敷地内にありました。また、母屋を取り囲むようにホリと呼ばれる池が廻らされ、川からの水を引き入れていました。

【雪と暮らす】

雪国・松沢の夏は非常に短いものです。5月にやっと雪が消えたと思うのもつかの間、8月のお盆を過ぎると朝晩の気温が10℃代にまで下がります。そして短い秋が過ぎると、11月10日過ぎにはもう根雪（春まで溶けない雪）が積もり始め、やがて家や道路をすっぽりと隠してしまいます。気温は零下3℃ほどまで下がり、ケーシキ（スコップ）が地面にベタベタとくっついたそうです。

こうした豪雪は家を傷めます。人々は大切な建物を守るため、軒下を茅で覆う「雪囲い」を施したり、屋根に上って雪下ろしをしました。家の周囲にあるホリは、屋根から落とした雪を溶かす役割もあったのです。しかし、対策措置をとっても屋根は傷みます。春になると、雪囲いをした茅を再利用して、傷んだ部分を葺き替えました。

家の中は、オメ（エ）にあるイロリで5尺（約150cm）もある薪を「ひと冬燃しっぱなし」にしていました。子供達はイロリの傍に設けられたホリゴタツで暖を取り、そこで宿題などもしていました。それでも家は隙間だらけで天井が高いため、ちっとも暖かくなかったそうです。

【子供たちと雪】

子供たちは基本的に裸足で生活し、4km離れた本校へ集団登校する際も防寒着らしいものは着ませんでした。当然寒く、手は紫色に腫れ上がります。低学年の女の子がその痛さに耐えられずに泣き出すと、一緒にいる年長の男の子が、その子の手を「バチン」と叩きます。そうすることによって手が少しだけ温まり、また歩き出すことができたといいます。

しかし、雪は子供たちに寒さのみをもたらすものではありませんでした。父親お手製の板でスキーをしたり、小正月には雪で作ったお堂に入り、お供えをしたり餅を焼いて食べたりしたそうです。

【養蚕】

貴重な現金収入源として、菅原家では昭和40(1965)年まで養蚕を行っていました。回数は年に1回でしたが、期間が6~7月であったので田畑の作業と重なって大変でした。朝は4時半か5時頃に起きて、朝食前の「アサシゴト」であるクワトリ(桑の葉を摘む作業)に出かけました。

生産したマユ(繭)は出荷しますが、出荷できないものは家で糸にして使いました。木綿が貴重だったため、農作業で履くダップリを絹で作ったこともあったといいます。

【農閑期の手細工】

長い冬の間、田畑の仕事がないからといって、暇なわけではありません。菅原家の人々には現金収入としての炭焼きや、山から炭などの荷物を運ぶ作業など、田畑以外の仕事もたくさんありました。なかでも日常的に使用する履き物やカゴなどは、春から秋にかけて田畑の作業や養蚕で手が空かないため、農閑期に1年分を作らなければなりません。そのため、冬場はこうした手細工を毎日おこなっていたのです。子供たちも大人と一緒に朝5時ごろから起き、朝食前の「アサシゴト」として、スミダワラ編みなどに精を出しました。

菅原家では、藁で日用品を作る仕事を「ワラシゴト」と呼び、藁製のものは全て自分たちで手作りしていました。

一方、藁以外のさまざまな植物の繊維も手細工に用いられてきました。菅原家から寄贈された民具は、アケビの蔓やガマ(蒲)など、さまざまな繊維で作られたものも多く見られるのが特徴の1つです。たとえば、ムシロにも、藁ムシロのほか、スガ(菅)で作ったスガムシロ、ホスガ(茅)で作ったホスガムシロなどがあり、それぞれの特徴を生かして用途を分けていました。

こうした材料から作られる手細工は、縄やムシロなどのほか、蓑、ワラジなどの履き物類、テング(手提げ)をはじめとする運搬具など、多岐にわたりました。菅原家の手細工は、材料の種類だけでなく、出来上がったものも実に多種多様です。依ひとつを取りあげても、コメダワラのほか、種を入れて寝かせるタネダワラ、堆肥の運搬をするためのコエダワラ、炭を運搬するスミダワラなど、多くの種類がありました。

家や生活様式同様、手細工にも雪国の特徴が見取れます。なかでもバンドリは特筆すべき手細工の一つです。山形、新潟県周辺では、荷物を背負うときの背中当てをバンドリと呼び、背負い梯子などを使って荷物を背負う際、背中に当てました。荷物と背中との間に挟むことによって、バン

ドリはクッションの役割を果たしたのです。また、バンドリは荷物が少ないときなどに目立つので、おしゃれの要素も持っていました。とくに結婚式で花嫁が婚家へ向かう際、ニショイと呼ばれる荷物持ちの人が使用したバンドリは祝いバンドリと呼ばれ、目のさめるような華やかな色と柄の凝った作りが特徴です。

ちなみに、ニショイは帰る際に「ニショイワラジ」という大きなワラジを履きました。菅原家からも、35cmもあるニショイワラジが寄贈されています。

(野口文子)

【衣—麻・木綿・絹—】

木綿は暖かく柔らかで丈夫な衣料ですが、寒冷地では綿の栽培が難しかったため大変貴重でした。木綿が普及する前は麻が主な衣料で、ヌノといえは麻を指しました。菅原家も麻畑を持ち、冬になると女は麻糸を績んで機を織りました。苧引板やオボケなどの製糸道具や、足縄で操作するヒラハタ・ヒ(大杼)など地機一式が寄贈されています。麻布は夏の野良着にしたり、反物を縞や緋の木綿の反物と交換しました。糸を作る際に出るオクソ(苧屑)は布団の中身にしました。

田に出るときの着物一式を「デダチ」と呼び、下衣は男女とも紺木綿のモンペ、上衣は縞か緋、女はさらにデダチ帯を締めました。木綿糸を細かく刺したサシコは防寒と共に布を補強・補修し長く着るための知恵です。マスザシという斜めの柄の模様ざしは大変な技術を要しました。

普段着は縞や緋が多く、ダップリという袴は男女共はきました。

養蚕を行っていた時は繭の出荷だけでなく、自分でも繭を煮て絹糸を取り反物を織ったそうです。出荷できないクズ繭は真綿にして布団の中身としたり、真綿を紡いだ糸でデダチ帯やソデナシを作りました。

風除け・暑さ除けとして作業時に被ったズキンなどの被り物や、山カヤ・シュロなどで作ったオバナボウシはこの地方独特のものです。

製糸・機織り・サシコなどはどれも大変手のかかる作業ですが、寄贈された衣類を見ると驚くほど丁寧な仕上がりで、丹精込めた作り手の思いが伝わってきます。古くなった衣類は最後はオムツや雑巾にして大事に使いました。

(木下あけみ)

旧菅原家住宅関係資料

ケーシキ

雪掻きの道具。冬は毎日雪掻きをした。



フカグツ

雪が降ったとき、道を踏み固めるのに使用した。



バンドリ

背中当て。重い荷物を背負う際など使用した。



バヂ

杉や薪を運搬する際に使用した。



マルエビラ

養蚕の道具。養蚕は現金収入を得るための大切な仕事であった。



ジュズ

長い数珠を大勢の人がお経を唱えながら廻す行事(ヒャクマンベン)に使用された。



ジュバン

作業着。サシコは木綿の生産に適しない地域で盛んに行われた。



『補任院號之事』

羽黒山から送られた書状。

